

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十卷 第一號

大正三十三年七月一日發行

論叢

所得本體の不明確又は捕捉難に基く不公平課税の可能
法學博士 神戸 正雄
 道徳統計概論説
法學博士 財部 靜治

フオン・ウイゼの社會學論
文學博士 米田庄太郎

海運同盟に對する政策
法學士 小島昌太郎

時論

米國の排日立法より生ずべき重大なる結果
法學士 作田 莊一

說苑

諸國の自作農創定事業
法學博士 河田 嗣郎
 獨逸レントン銀行に就て
法學士 大森 研造

雜錄

勞農露國に於ける幣制改革問題
經濟學士 谷口 吉彦
 京都帝國大學經濟學會大會記事
委員

フォン・ウイゼの社會學論 (三)

(獨逸最近の社會學論の五)

米田庄太郎

三 「ケルン社會科學四季雜誌」に於ける社會學論

フォン・ウイゼ氏は千九百二十年に「シユモラー年報」に於てさきに述べし「特殊學としての社會學」を公に、フォン・ベーロー氏の社會學排斥論に答へて、特殊學としての社會學の可能性及び必要を論辨し、同氏自身の新しき社會學論を發表したる後、千九百二十一年同氏が編纂せる「國民教育の社會學」(Soziologie des Volkbildungswesens. 1921.)に於ける同氏自身の論文「社會學的に考察せる國民教育の概念及び問題」(Der Begriff und die Probleme der Volksbildung, soziologisch betrachtet.)中や、又千九百二十二年イェナに於て開設された第三回獨逸社會學者會 (Der Dritte Deutsche Soziologentag)に於ける同氏の講演「革命の社會學の問題論」(Problematik einer Soziologie der Revolution. Verhandlungen des III. Deutschen Soziologentages. 1923.)中に於ては、同氏

の社會學論を論述されて居る。併し余の知る處では、同氏が同氏自身の新しき社會學論を最も組織的に概説されて居るのは、「ケルン社會科學四季雜誌」に於て公にされた二論文、即ち「關係論の方法論に就て」(Zur Methodologie der Beziehungslehre)及び「關係論の一體系建設の綱概」(Skizze des Aufbaus eines Systems der Beziehungslehre)に於てであると思ふ。それで此處には主として右の二論文によりて、今日最も成熟せる同氏の社會學論の一般を示すこととする。余輩は此等の論文によりて、獨逸にありてはジムメルによりて創説された社會學の新方針、形式社會學或は純正社會學の概念は、今日同國に於てどれほどまで發達して居るかを學ぶことが出来るのである。

却説「ケルン社會學四季雜誌」(Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften)は千九百十九年四月設立されたる「ケルン社會科學研究所」(Das Forschungsinstitut für Sozialwissenschaften in Köln)の機關雜誌にして、同研究所が社會學研究の部と社會政策學研究の部との二部に分たれて居るのに應じて、毎年二冊は社會學の研究に、又他の二冊は社會政策學の研究に配當されて居る。而して同研究所の社會學の部の理事は新設のケルン大學社會學及び經濟學教授フォン・ウイゼ氏及び同社會學及び哲學教授マクス・シェラー氏(Max Scheler)であるから、隨ふて同雜誌の社會學の部分には、矢張り右の二氏が編纂されることになつて居るが、實際上主として其の編纂の任に當つ

て居るのは、フォン・ウイゼ氏である様である。

尚ほ同雜誌社會學の部分 (Reihe A.) は更に一般的部分と特殊的部分即ち關係論の部分 (Archiv für Beziehungslehre) とに別たれて居るが、其の特殊的部分即ち關係論の部分と稱せられるものに於て、フォン・ウイゼ氏及び同氏と同じ方針をとる社會學者、即ち社會學を社會形式を研究する特殊學と見る社會學者、或は形式的社會學 (eine Formale Gesellschaftslehre) を主張する社會學者の研究が發表されて居る。されば此の關係論の部分は、フォン・ウイゼ氏一派の人々の機關と見做し得られるのである。而して余が上に挙げしフォン・ウイゼ氏の二論文即ち「關係論の方法論に就て」及び「關係論の一體系建設の綱概」は、共に右の特殊的部分或は關係論の部分中に公にされたものである。

(イ) 「關係論の方法論に就て」 (I. Jahrg. Heft I.)

此の論文はさきに述べたる「特殊學としての社會學」の方法論の部分を修正補充せるものにして、吾人は之れによりてフォン・ウイゼ氏の社會學論の、今日までに最とも圓熟せる思想を、簡単に學ぶことが出来るのである。此處に此の論文中、余が同氏の社會學論の最とも重要な部分と認めるものを説述することとする。

今ジムメルに從ひ、フィアカントに賛同して考ふれば、社會化の形式の研究 (das Studium der

Formen der Vergesellschaftung)は、永久的に唯一な課題ではないとしても、先づ第一の、最も効果の多い、少なくとも他の諸課題と相並んで今日決して輕視す可からざる課題であると思ふ。但し形式的社會學の外に、之れと同様に現實的な特有の認識價値を有する他の社會學が存在するや否やと云ふ問題に就ては、無用の論争を避ける爲めに、余は此處に論及せず置きがよからうと思ふ。而して他の種類の社會學を研究する人々も、形式的社會學に専ら力を注ぐ余輩を、直ちに學問の國に於ける無用な食客として誹謗す可きでないと思ふ。余輩にありては、ジムメルの意味で云ふ形式的原理は一の出發點である。余輩は之を一の啓發的或は發明誘導的原理と認め、而して先づ「形式は内容から切り離される」と云ふ假説を設定するのである。

さはれ「形式」或は「形式的」と云ふ語を用ゆるは、あまり適當でない。而して若し形式と云ふ語の多義なることや、又殊に形式の種類や強度の多様なることや、更に時としてはあまりに茫漠たる形式と内容との對立なぞが、種々なる誤解を惹起しなかつたならば、既にジムメルに加へられた多くの批評は避けられたであらう、或は弱められたであらう。ジムメル及び彼の社會學上の仕事を進めようとする余輩は、各具體の場合の實質問題から出來るだけ切り離せる、一切の生活領域の社會化過程 (Vergesellschaftungsvorgängen) に於て、まさしく社會的なものを引き出さんとする。而して此の際には最も一般的な抽象物が取扱はれるのであるから、此の社會學と他の

社會的諸科學との對立は、形式(其の儘で社會的なるもの)と内容(其の儘で具體的なる實質問題)との、同様に最も一般的ななる對立に於て、よく云ひ表はし得られると思はれる。併し此の事は常に正當には理解されて居ない。

そこで他の名稱を用ひるのがよいかと思はれる。夫れは形式と云ふ語の代りに、關係 (Beziehung) と云ふ語を用いることである。吾人若し特殊の場合の目的及び實質問題から切り離せる社會的生活の事實から、只其等の事實に於て成立する人間の相互關係の仕方及び本質のみを抜き出さんとするならば、吾人の課題は其の一般性が一般に許すだけ明亮に表示されるのである。既にフィアカントは正當に、關係を社會學的思惟の基本範疇と稱して居る。

かくて事物の概念との對立に於て、關係の概念を基本範疇に高めることは、決して新しい事ではないのである。ジムメルも亦問題をそう云ふ様に見て居る。只余(フォン・ウイゼ)は更に進んで、此の部分學科全體を「社會的關係論」(die Lehre von den gesellschaftlichen Beziehungen) 或は簡單に「關係論」(Beziehungslehre) と云はんとするだけである。而して此の名稱は「形式的社會學」よりは、一層成形的で又明亮であると思はれる。

併し夫れによつて只名稱が定められ、又其の意味が甚だ表面的に指示されただけである。而して更に一層重大なる問題が起る。(1) 此の關係論の問題或は任務は何であるか。(2) 何故に吾人は關

係論を、先づ第一に取扱ふ可き、又最もも重大なる問題として考へねばならぬか。關係論は人間の社會的生活に關する吾人の知識を、本質的なる諸點に於て促進すると認む可きか。(3) 關係論は如何に取扱はる可きか。

社會概念は直ちに關係の概念を指示する。「社會は其の最もも廣い意味に於て又同時に其の最もも狭い意味に於ても、人間と人間との關係である」と云ふギゾーの言葉は正當である。余輩は又此の概念を形而上學的概念として取扱はない。夫れは先天的性質のものであるか、又は吾人の經驗の結果であるかは、敢て問はない。余輩は此の問題を哲學に任かせる。余輩は只、關係に於ては二つ或は二つ以上の量が各々獨立な量として存立するに拘らず、其の間に部分的合致及び共同性が生起する程、相互に結合して居ることを、考へるだけである。

併し余輩の關係論に於ては、常に論理的關係のみならず、更に社會的關係が考られて居る。此處に關係に入り込む量は、人間或は人間の集團的構成物にして、其等のものは能働的(精神的或は身體的)に相互に作用するのである。

そこで余輩の課題或は任務は、社會的關係を記述し、分析し、彙類し、測定し、而して組織化する事である。かくて余輩の研究は經驗の地盤上に行なはれるものである。關係論は純經驗的性質のものである。而して關係論は殊に個々の關係の分析に於て、心理學の知識を利用せねばな

らないが、しかも心理学と同じものではない。心理学に於て動機論が研究される以上、心理学は社會學に接近する。動機論は心理学より社會學への橋を架けるものである。而して兩者の差別は、社會學者の共觀的或は總觀的考察法 (die synoptische Betrachtungsweise) と心理學者の個別化考察法 (die individualisierende Betrachtungsweise) との差別に存するのである。

此の場合に一の學科が他の學科を蠶食し、一の科學が他の科學に侵入することは、疑はれない。此の場合に成立する結合は、個人心理学より社會心理学へ、又社會心理学より心理社會學 (von der Individualpsychologie zur Soziopsychologie und von dieser zur Psychosozilogie) へ進む。社會心理学に於ては社會的結合によりて影響され或は他人の上に作用し得る個人的心理生活 フォルメン の過程が、記述される可きである。而して心理社會學は社會的結合に於て現存する兩人の共觀的考察を行なふもの、かくて夫れは既に社會學の一分枝である。

關係論の課題或は任務を右の如くに規定することによりて、關係論は明らかに價值論の一部門でなく、實在論の一部門として、事實的なるもの、組織化として表示される。而して其の現象論的性質 (ihre phänomenologische Natur) が確立されるのである。

此處に吾人の注意す可きは、社會學と心理学との密接なる結合に就ては何等異議を挿まないが、併し夫れによりて「社會現象の組織論」に到達されるや否やを疑ふ人々の批評である。クルル

ト・ジנגガーも亦、ジムメルの社會學概念を批評するに當つて、「非常に微妙な諸結果が一の新しき統一に調整されなければ、尙ほ又適用範域の一義的限定も可能でない」と云ふて居る。

此等の總合家は現象論的心理社會學 (die phänomenologische Psychosozologie) から去りて、より狭き社會學への途を求め。殊に注意すべきは、シュパン (Spann) がブリントクマンの著書を批評する際に、「社會心理學の方針」(die gesellschaftspsychologische Richtung) に對して提出せる非難である。左にシュパンの言葉を擧げて置く。

さはれ全體、人間の心理的結合の分析は、どうして「社會」に導く可きか。此の分析は必然的に心理的なるもの、範域に止まり、決して此の魔の輪を通り抜けることが出来ない。「社會」とは是れ心理的なるものとは、本來他の種類のもの、他の平面、實在の他の形態であるので、宛も「心理的なるもの」は「物理的なるもの」、「器械的なるもの」とは異なる平面、又「目的論的なるもの」とは異なる平面であるが如くである。されば如何にして、例へば動機或は動機作用の組織論が、或は「同情」「暗示」「憤恚」などの心理的現象が、「國家」「經濟」「社交」「法律」等に導き得るか。若し夫れが出来らば、以前に連合心理學の主張せる有名なる連合法則 (Assoziationsgesetze) が「社會的感情」及び其他のものに導ける如く、又「社會」にも充分に導かなければならぬ筈であつた。併しブリントクマンも夫れを排斥して居る。眞理は是れである。即

ち連合過程は常に「客間に於ける社交」(Geselligkeit in einem Salon)の如き社會的過程(前者は後者の前定)と異なれる或物を表現するのみならず、更に「同情」或は「憎悪」が夫れ自身に於て含む心理的作用の交換は、「聯合或は同盟」、或は「家族」或は「戦争」等の社會的現象とは異なる或物であると云ふことである。吾人が「社會」に於て目前に見る處のものは、心理的なるものとは異なる平面の現象、異なる観察方針の現象である。社會は個人の心理的相互關係の總計ではなく、其の「全體性」に於て、或は「諸節或は諸部分から成立する全體」(例へば共同生活團體の如きもの)である可き其の特有性に於て、其の本質が含まれて居るのである。心理學が生理學に、又生理學が物理學に還元されない如くに、まさしく社會學も心理的相互關係に還元されないのである。心理的相互關係の分析は、「心理的因果性」の一種を以て行なはれるが、社會學は部分の肢體性(die Gliedlichkeit des Teiles)を、部分が全體に連結されること(die Beziehung des Teiles aufs Ganze)を云ふが如き、全く他の範疇を以て研究する。社會學は全體と部分との關係を取扱ふので、動反動或は作用と反作用との關係を取扱ふのでない。(mit dem Verhältnis Ganzes zu Teil, nicht aber mit dem Verhältnis Wirkung zu Gegenwirkung)

今右に述べしシユマンの批評に對して、余輩は左の如くに論じたいと思ふ。即ち部分と全體との關係に關する單なる考察は、只一の外部的なる圖式化(Schematisierung)を産出するだけで、

其の内部的必然性は證明され得ない、或は夫れは社會學外的規範から引き出されねばならぬ。而して此の場合には社會學の任務は又、最も一般的な種類の組織化に於て甚だ迅速に盡きて仕舞ふ。社會的構成物（例へば階級、國家、教會、家族其他のものは、只吾人が其等の社會的構成物に導いた處の、又尙ほ導く處の、社會化の諸過程を深く研究することによりて、説明されるものである。然るに其等の過程は相互關係の無數の集積である。而して其等の相互關係は、主として心理的由來を有するものである。人々若し其等の現象にまで進入せんと欲しないならば、社會的类型を一般化する處の、又は既に述べし如く規範的倫理的にして隨ふて非社會學である處の、何れか間もなく研究し盡くされる單なる彙類或は分類に止まるであらう。余輩は現實的には社會的構成物を結局只人間の心意或は體質から説明し得るだけで、此くて部分的に、而して益々増大する度合に於て、之を心理學的に研究せねばならないのである。

人間の心理的結合の分析から社會即ち社會的集團形成物への途は、以上述べし處によりて明らかにされたと思ふ。實に社會的構成物は只人間相互の無數の作用の抽象的客觀化に外ならぬ。吾人は階級、國家、家族其の他のものを、只右に述べし途に於てのみ理解し得るので、何れかの他の途をさらば、吾人は思辨、歴史哲學、倫理學或は形而上學に陥るのである。

されど尙ほ或疑問が残つて居る。夫れは心理學的説明だけで充分であるかと云ふ問題、及び關

係の研究及び調整の外に、更に人間及び團體的構成物を其の機能に結び付けて考察することが必要でないかと云ふ問題である。

余輩は心理主義 (der Psychologismus) に對する非難を、幾多の獨逸の學者間に於て見出すのみならず、外國に於ても心理學派は他の諸方針と戰ふて居る。米國に於ても心理學派は今日大なり小なり承認されたる其の勝利を、奮闘せずを得たるものでない。佛國に於てはヅールケム及びアドルフ・コストは、心理學的考察法に反對して、一の客觀的社會學を要求した。彼等の考へる處によれば、プリンクマンも亦考へる如く、體系構成は主觀たる人間から行なはる可きものでない。吾人は社會的生活の現象を、純客觀的な、人間心意の外に立つ一標準の助けによりて整理しなければならぬ。コストは社會生活の一切の形體の發達を決定する最後の衝動方として、精神的或は心理的な何物をも含まない一の事實を認め、之を益々増長する人口の壓迫と見るのである。プリンクマンは心理學的方針に於ては、社會的構成物の第二方面、即ち社會的外界の諸科學が研究し、法律的及び經濟的事實の記述や、力及び作用の統計的測定等が行なはれる方面との關係が、缺けて居ることを悲んで居る。

單に人間のみから生起しない外界の部分の一定の事實及び法則は、心理的なるものと相並んで確かに同等な重要を有する。併し其等のものは心意の媒介を通過するか、又は物質的實在として

の人間に關係するかによりて、其の重要性を獲得するものである。されば生物學的考察法は心理社會學的考察を補充するものにして、而して關係論に於ては決して輕視されないものである。

機能に關しては、余輩は機能は關係ベキニケツと概念的に反對するものでなく、只其の一定の亞種である
と考へる。人間及び團體の任務及び作用或は機能は、一の目的に向けられない處の、而して此の意味に於て組織されたる其の他の單なる實在諸關係ベキニフンケツと全く同様に、我と汝との諸關係ベキニケツから導かれるのである。

人若し機能を其の上に立てられたる一規範の流出として考へるならば、此處に再び思辨の危險が生じ、社會學的研究の助けによりて歴史を意明せんとする企たてが、入り込んで來るのである。併し總ての早まれる規範給附は現實主義的、經驗主義的關係論の彼岸に在るものである。余輩は社會化過程の分析から進み、而して社會的集團力の構成物の理解に上らんとするが故に、まさしく其の方針で研究する處の關係論を設定するのである。社會的集團力の構成物の理解に進み行く途は、外に全く存しない。

ジムメルが相互に連結しない多數の分析を行なふに止まつたと云ふ事は、彼の方法の性質によるよりは(但し其の方法も彼は徹底的に遂行しなかつた)、寧ろ彼の學問的特質によるのである。彼は分析されたる諸關係を、更に進んで分類或は彙類しなかつた。併しより複雑な關係をより簡

單な關係に還元して、其等の諸關係を組織することは、之を分析すると同等に必要である。

以上述べ來りし處によりて、フォン・ウイゼ氏の社會學の方法論は大體上如何なるものであるか、又同氏の主張する處の一の特殊學としての形式的社會學、即ち同氏が新に命名せる關係論なるものは、大體上如何なるものであるかは理解されると思ふ。そこで余は更に進んで、同氏は其の關係論としての形式的社會學を如何に實際上組織せんとするか、即ち同氏の關係論のプログラムは如何なるものであるかを研究せんとするのであるが、今同氏の關係論の考案或は其の體系の一般は、さきに述べし同氏の論文、「特殊學としての社會學」によりて、大體上之を窺ふことが出來るのである。併し同氏は「ケルネル社會科學四季雜誌」第二年度第四冊に公にせる論文「關係論の一體系建設の綱概」に於て、更に之を修正して稍々詳しく又組織的に論述して居る。それで此處に其の論文によりて今日最も成熟せる同氏の關係論の體系の一般を示すこととする。

(v) 「關係論の一體系建設の綱概」(2. Jahrg. Heft 4.)

今フォン・ウイゼ氏が本論文に於て關係論の體系と稱するもの、或は社會學の體系と稱するものは何であるかと云ふに、同氏は先づ同氏の關係論或は社會學の體系と云ふは、何を意味しないかを述べて、消極的に之を説明して居る。其の論ずる處によれば、關係論の體系は社會哲學でない、最後の本質究明及び倫理的評價を企だてるものでない。次に夫れは社會の形而上學でない。

更に夫れは社會的諸科學の百科全書でない。夫れは歴史を意明せんとするものでも、亦一の階段論 (Eine Phasenlehre) を與へんとするものでもない。夫れは更に哲學者、國家學者、神學者等が取扱ふ對象に對する、單なる考察法でない。例へば精神生活の發達或は國家の發達を、國民經濟及び階級組織との内部的及び外部的結合に従ふて研究せんとするは、此くて精神史或は國家史を社會學的方法に従ふて考察せんとするは、關係論或は社會學の任務でない。關係論はかゝる任務を、夫れゝの範域に於て夫れゝ特有の考察法の外に、更に社會學的に考察する處の哲學者、經濟學者、法學者、民族學者等に譲るのである。

關係論、或は夫れと解される社會學は哲學、史學、國民經濟學及び其の他の學から區別される、一の特殊な經驗的な社會的特殊學或は個別學である。夫れは此くの如き學として、又單なる技術でも、又は技術論でもない。學的政治學及び倫理學の總ての種類に對して、夫れは生活の當爲範域を取扱ふものでなく、實在範域を取扱ふものである。夫れは何等の實際的又は理想的要求をも呈出しない、而して社會政策、社會的福利増進策論、優種學等から明らかに區別される、しかも社會的技術の基礎及び出發點を與へる任務を有するものである。

フォン・ウイゼ氏は夫れより同氏の關係論、或は夫れと解される社會學の體系を、左の十二項に大別して、積極的に説明して居る。

(I) 人間相互の關係及び其等の關係から生ずる諸般の構成物の理論的經驗的な社會的特殊學或は個別學として、社會學は二部門に大別される。夫れは(A)第一等級關係論、即ち(a)個人相互間の關係及び(b)個人と社會的構成物との關係と、(B)第二等級關係論、即ち(a)構成物論及び(b)其等の構成物間の關係論とである。約言すれば狹義の關係論と構成物論(Beziehungslehre im engeren Sinne des Wortes und Gebildelehre)とが大別する可きである。

關係論に於ては、余輩は幾多の舊論争を謬れる問題呈出として退ける。夫れは(一)個人主義と普遍主義との反對、夫れと共に(二)「個人」又は「社會」は社會的產物であると見る見解、(三)夫れより生ずる結果として、社會の要素に關する問題、及び(四)社會は契約に基づくか、又は有機體であるかと云ふ問題である。而して(五)第一次的なものは人間であるか、又は社會的構成物であるかと云ふ問題も亦、余輩にとりては無意味である。是れ余輩は兩者の同時性及び不斷の相互作用を承認するからである。

社會的關係は之を單に平面的に見るのでなく三次的に見れば、社會的過程(Soziale Prozesse)、人間の行動(積極的及び消極的の意味に於て)である。而して社會的過程の非常に多種多様な紛糾を整頓することが課題である。

關係の概念は事物及び形質^{アイゲンシャフト}に對して限定されることによりて規定される。事物は不變と考

へられる一定の諸形質を具有する處の、確實に與へられたる或物である。關係學的考察法にありては、此等の諸形質は幾部分相互作用に分解される。事物の本質を規定する爲めに、吾人は關係を形質に取り替へる。而して此の分解過程に構成過程が對立する。事物の絶へざる能動的相互作用（かくて關係の現存）は、更に事物の發展及び分化に、而して特性の増加並に事物の累積に導くのである。關係過程は絶へず一の事物から他の事物へ或物を輸入するから、此處に關係により、運動の相互的影響の中に構成物が生起する。此の場合に是れまで相離れて居た事物が一方に於ては相結合せられ、他方に於ては益々強く其特性を表現する。比喩的に云ひ表はせば、構成物は關係から生起する結晶化の結果である。但し一切の形質が關係に還元されるのではない。事物には本質的及び中核的な形質があつて、而して其等の形質は社會的過程によりて、只第二次的な形質を以て包まれるに過ぎない。（人間に於ては、社會的關係の生産物たる「社會的自我」と、社會學的でなく只哲學的或は生物學的にのみ説明する可き人格的自我との區別が、立てらる可きである）。

右の如くに社會的過程を解釋することからして、社會概念は吾人にありては只一の發明誘導的或は啓發的原理の避けられ難き省約的表出に外ならぬと云ふこと、「社會」とは吾人にありては動詞的性質を有するものにして名詞的性質を有するものでなく、一の進動或は過程にして實體では

ないこと云ふことが隨起する。

(II) 社會的過程或は關係過程は、(a) 結合する過程、(b) 分解或は弛解する過程、(c) 一定の關係に於て結合し、他の關係に於て弛解する過程である。更に總ての社會的過程は (a) 實在過程及び (b) 機能過程として研究される。

倫理學、心理學、美學、政治學等は人間關係を夫れ夫れ異なる見地の下で考察する。併し社會學は只相互へ (Zueinander) 及び相互から (Auseinander) の種類及び度合のみを考察するのである。(但し上に (c) を稱せる過程の下に於て、特に重要な混合形體を含めて考察する)。突き詰めて約述すれば、關係論は只結合或は合致への運動か、又は遁逃への運動 (die Bewegung zur Vereinigung oder zur Flucht) を知るだけで、社會學に於ては第三者は與へられて居ない。而して吾人は此等の運動の分量化 (die Quantifizierung) を行なはねばならぬ。學問的研究の任務全體の立場から見れば、各個別關係の特に分量的なる方面は、個別研究に委ねられて居る。個別研究にありては、確かに各個別關係の「事物的内容」(Sachl.) の表明は、特に興味あるものである。社會學者は社會學的に無關心なる關係、即ち結合することも、亦弛解することもしない様な關係の存在を承認し得ない。是れ事物の一切の運動は、相互に對する空間的地位の變動であるからである。社會學者は又關係の何れの他の分類をも企及することが出来ない。是れ何れの他の分類も、

只内容的な、社會學者にとりては第一次的に重要でない特徴に基いてのみ、行はれ得るものであるからである。例へば法關係は、所謂法社會學(即ち法學の一定の考察法にして、關係論と混同されてはならないもの)に對して、最大の重要を有するかも知れぬ。併し夫れは關係論に於ては興味を感じられぬ。蓋し夫れは既に一定の抽象即ち法の概念に基いて、認められたるものであるからである。法學は法主體の關係を取扱ふ可きものにして、直ちに人間の關係を取扱ふ可きものでない。法學が「社會」を通じて設定する「平面」は、社會學者の設定する「平面」とは異なり、法學の立てる區別は社會學者の立てる區別とは、種類を異にするのである。

今個々の社會的過程は又、夫れが一定の機能を行ふや否やに就ても、研究さる可きものであると云ふは、吾人の考察を経験的範域から目的論的範域へ移す様に見るが、されど此處に關係の目的及び任務の問題は、矢張り只社會學的に研究されるだけである。即ち只個別現象或は過程は、社會化(或は個性化)の全過程と如何に結合するか、吟味されるに止まる可きである。(かくて吾人は例へば競争に就て、夫れは社會全體内に於ける地位を、個人に指定する機能を有すると云ひ得るのである)。

(III) 關係論は社會的過程を、只夫れを(a)記述し、(b)分析し、(c)測定し、(d)比較及び組織すると云ふ意味に於てのみ、「説明」す可きものである。而して分析に於ては二つの考察法が肝要である。

一は社會的過程を客觀的なる自然事象として把握することにして、二は主觀的的心理的現象として把握することである。第一の場合に於ては、社會學と生物學との結合が殊に重要にして、第二の場合に於ては、心理學との結合が殊に重要である。而して前者に於ては社會的過程は空間、時間、物理的、化學的法則等に從屬するがまゝに考察され、後者に於ては人間行動の動機の研究、心理的根柢の探求が行なはれる。さはれ社會學は第一次的に心理狀態を取扱ふ可きものでなく、先づ第一に人間の集合に於ける絶へざる變動を取扱ふ可きである。尙ほ分析は社會的過程を惹起する諸勢力を探究し、(a)内部的動力、(b)外部的影響、機會、壓迫、弛解等を見出す。而して測定は關係の出現及び消滅の度數、持續、強さの度合、及び時間的關係等の研究を行ない、比較及び組織化は既に分析に於て遂行された以上に、結合せるもの及び複合的なるものを其の要素に於て分解する。但し總て此等四種の方法に於て、評價作用は全く入り込まないのである。

(IV) 一切の社會的過程が相集まつて社會化(die Vergesellschaftung)の全過程を成す。此處に此の社會化と云ふあまり適切でない言葉は、親和及び離隔(Gesellung und Vereinzelung)として、積極的及び消極的の意味に於て解さる可きである。最後の狀態は前者にありては絶對的親和(absolutive Geselligkeit)にして、後者にありては絶對的孤獨(absolutive Einsamkeit)である。此の場合に成立する人間典型は、抽象的に考ふれば、前者にありては社會人(der Gesellschaftsmensch)にして、

後者にありては孤獨人 (der solitare Mensch) である。心理學的に云へば、我等感情 (das Wir-Gefühl) の生起も亦、我感情 (das Ich-Gefühl) の生起も、共に究明する可きである。

相互へ及び相互と (Zu- und Miteinander) の關係と、相互から及び相互に對抗して (Aus- und Gegenander) の關係とに、人間諸關係を分類することは、兩種類の間に何等根本的な反對を意味しないので、夫れは矢張り只發明誘導的原理として用ひられるだけである。親和増進の過程は一部分又相互對抗の關係から生起し得るし、之れと同じく後者は一部分又前者から生起し得る。余輩は圖式的に、次に余輩が A 關係と稱する相互への關係を、B 關係と稱する相互からの關係と區別するのである。

V) A 關係は接觸 (Kontakten, Berührungen) を以て始まり、夫れより積極的親和の度合に従ふて、
 (a) 接近、(b) 適應、(c) 均衡、(d) 合致、等に階段附けられる。而して B 關係は敵對の度合に従ふて合目的に、(a) 競争 (Konkurrenz)、(b) 反對 (Opposition)、(c) 衝突 (Konflikt) 等に階段附けられる。

増進する接近に到達し得る接觸は、第一次的即ち同場處的接觸であるか、又は二次的な、より大なる距離に亘りて作用する接觸であるかである。而して之れと結び附けて身體的接觸と社會的接觸との區別が立てられる。又同情的接觸と部類的接觸との區別や、任意的接觸と不任意的接

觸との區別も重要である。接近は寛容或は耐忍から妥協への途に於て成就される。而して夫れから合致或は融和へ、持續的協働及び編制への長い途は、一定の屢々外部から強制される目的（例へば第三者に對する鬭争、協働者間の争ひを除くこと、共同的なる技術的或は經濟的任務）によりて促進される。此處に動機として相互扶助が、而して技術として分業が、屢々作用する。時としては接觸から合致或は融和の進行は、兩者の中間的諸階段が飛び越される様に見ゆる程急速である。是れ多くの戀愛關係に於て見る處のものである。

特に興味あるは、A過程とB過程との交叉である。例へば競争（余輩が主として敵對の弱められた形式と見做すもの）は、其の中に又協働の要素を含んで居る。角逐及び嫉妬は分離させ又結合させる。而して相互へ及び相互からの關係の輪を主として運轉させる動力は、利害の念或は利己心である。但し夫れは決して唯一の動力ではない。

(VI) 社會的構成物として考察されるものは、(a) 群集、(b) 團體、(c) 抽象的集團等 (Massen, Gruppen, abstrakte Kollektiva) である。

關係論の主要任務の一は、如何にして關係の累積から構成物が構成されるかを示すことである。但し構成物は個人の單なる總計と同じものでなく、一定の關係に於ては夫れ以上に達する或物である。而して右の構成物の三種は、社會化及び抽象性の度合に従ふて、相互に區別される。

發達せる國家は抽象的集團に屬するが、併し殊に其の下等な階段に於ては或度までは具體的團體の性質を有する。抽象的集團の本質は教會に於て一層明らかに現はれる。經濟的企業も亦團體から抽象的集團に發達し得る。

此處に吾人は群集の本質を不問に附し、夫れは充分説明されたものと假定すれば、團體は其のより大なる持續性によりて、又團體要素が團體に從屬することに付て有する一層明亮なる意識によりて、又他の團體とのより明かなる相互關係によつて、又慣習及び傳説の發達、并に團體に於ける編制即ち機能の進化及び分化によりて、群集と明らかに區別される。而して團體の心理的根柢は一の特殊な團體精神 (ein besonderer „Gruppengeist“) である。時としては團體は群集から生起するが、一層多く個人的交通の關係から、否な單なる接觸からさへも、直接に生起する。團體の持續性、効驗性及び確立性は、其の中に存續する處の、或は團體が依て以て他の構成物と結び附けられる處の社會的過程に、全く依存するのである。

(VII) 各團體は (a) 指導する力、(b) 執行する力、(c) 考へる力、及び (d) 感ずる力を具有せねばならぬ。而して各團體要素は此等の機能の一以上を行ない得る。

(VIII) 構成物の内部に於て、或は構成物間に於て有効に行なはれる社會的過程は、其の一般的本質に從ふて、上に (II) の下で論述せる諸關係と同じものであらねばならぬ。只此處には幾部分特性の

稍々異なる表示、随ふて異なる命名が行なはれるだけである。而して余輩は(a)分化する(弛解する)過程と、(b)集結する(結合する)過程とを區別する。更に團體の保持の見地から、(a)破壊する過程と(b)改造し造營する過程との、第二の區別が立てられる。余輩は次下分化する過程をC過程、集結する過程をD過程、破壊する過程をE過程、而して改造し、造營する過程をF過程と稱する。

(IX) C過程は左の如くに排列される

(a) 不同等の生起、(b)支配、(c)階段化及び成層化 *Abstufung und Schichtenbildung*、(d)陶次、(e)個性化、孤立化、及び疏遠或は離反 *Individuation, Absonderung und Entfremdung*。

(X) D過程に屬するもの

(a) 同等化、(b)編入或は排列、優位及び劣位關係 *Einordnung, Ober- und Unterordnung*、(c)社會化

(XI) E過程は破壊的に作用する

(a) 酷使 *Ausbeutung*、(b)依估及び贈賄、(c)増大する無關心、(d)形式主義及び骨化 (*Verknochnerung*)、(e)商業化或は營利化、(f)急進化或は過激化 (*Radikalisierung*)、(g)轉倒或は逆化——最後の結果(h)破滅或は滅亡

(XII) F 過程は

(a) 制度化 (Institutionalisierung)・(b) 職業化 (Professionalisierung)・(c) 新形成、(d) 解放

尙ほ上に述べし諸過程の交叉、彼等が相互的に強め合ふこと、弱め合ふこと、或は抑壓すること等は、甚だ興味深い現象である。例へば不同等の生起と支配との結合は、優劣位關係及び制度化に導くのである。研究仕事の中心點は、一般に全體系に存せずして、個別研究に存する。例へば商業化或は營利化の過程、即ち團體結合が益々増大なる度合に於て、經濟的利得増加或は利潤の見地の下に置かれる一の社會的發達過程を研究すれば、其の中に資本主義の理論及び歴史の全體が含まれて居る。又階段化及び成層化を研究すれば、夫れは他の見地の下では社會的階級及び身分の理論全體を含む。

さはれ上に述べしが如き、社會的諸過程の一體系の確實なる足場を設定することは、社會學的個別問題を益々精密に、又遺漏なく研究し盡くす基礎を與へる。革命を例として云へば、社會學者は之を歴史哲學的、倫理學的、法學的、經濟學的に取扱ふ可きものでなく、寧ろ如何なる社會的過程が之れに先立ち、又之を充たすかを研究するのである。此處にも亦全目標は社會的構成物に於て、又人間の交通に於て(此處では革命に於て)人間の集合或は配合の改變(Umgruppiierung)の仕方の一表象を與へることである。而して此の目的の爲めに、此處に如何なる淘汰や成層化や支配關係や急進化や其の他の過程が行はれるか、研究されるのである。歴史的事象の特質に従ふて、其

の中に於て多くの社會的過程が除去され或は退けられ、而して他の諸過程は強められるであらう。

四 フォン・ウイゼの社會學論に就て

却説前節に於て述べし處によりて考ふれば、フォン・ウイゼ氏の社會學論はジムメルの社會學論を今日までの處で最も徹底的に展開せるもの、少なくとも其の一であると思ふ。而して余が千九百八九年頃立てた余の社會學體系に於て其の中心的部門と認めて居る純正社會學の概念は、舊師タールド先生の見解から出發したものであるが、併し又ジムメルの見解をも批判的に取り入れて組み立てたもので（尙ほ其の他の諸家の見解をも批判的に取り入れて居る）あるから、フォン・ウイゼ氏の關係論の概念や其の體系は、多くの點に於て根本的には余の純正社會學の概念及び考案に類似して居る。されば余はフォン・ウイゼ氏が近頃獨逸の學界で盛んに余の純正社會學に類似せる同氏の關係論を主唱され、又多數の有力なる協賛者を得て居るのを見て、非常に興味を感じて居るのである。

尙ほフォン・ウイゼ氏は同氏の千九百六年の著「社會學の基礎確立に就て」の中に、タールド先生の「摸倣の法則」を舉げて居るから其の頃から既にタールド先生の見解を知つて居たと思はれるが、併しよく之を理解して居なかつたものと見へ、同書に於ては別にタールド先生の影響は認められない。然るに第一節に於て述べし千九百二十年の論文「特殊學としての社會學」に於ては、同

氏は、既にタールド先生の影響を受けて居ることが察知されるが、更に前節に於て述べし千九百二十二年の論文「關係論の一體系建設の綱概」に於ては、其の影響は甚だ明白に認められる。但し夫れは直接にタールド先生から受けた影響であるか、又は米國のロックス氏の影響を通じて間接に受けた影響であるかは確かでない。是れフォン・ウイゼ氏が直接にロックス氏の影響を受けて居ることは、同氏自身の言葉によりて明らかに知り得られるが、併しタールド先生に就ては同氏は明らかに何とも云ふて居ないからである。しかも同氏が直接にせよ又間接にせよ、タールド先生の影響を受けて居ることは、殊に前節に述べし同氏の關係論の最とも完成せる考案によりて明白である。而して其の事は殊に同氏の關係論と余の純正社會學との間に、根本的類似の存する主要なる一理由であると思はれる。

されどフォン・ウイゼ氏の社會學と余の社會學との間には又重大なる差異がある。夫れは同氏は同氏の關係論を以て社會學の全體と見るが、然るに余は余の純正社會學を以て社會學の中心的部分と見るが、しかも矢張り社會學の一部門と見るだけで、其の全體とは見ないと云ふ事である。而して此の點は今日の獨逸の社會學論争の中心問題となつて居るものであるので、余は尙ほフォン・ウイゼ氏の如き方針とは異なる方針をとる他の社會學者の見解を述べた後に詳しく論述したいと思ふから、此處には只フォン・ウイゼ氏の社會學論と余の社會學論との間には根本的に一致する處があると同時に又、根本的に差異する處あるを一言するだけに止めて置く。

今本論文前數節に於て述べし處によりて、フォン・ウイゼ氏は始めはデイルタイの影響を受けて社會學を建設せんとせしものなること、及び後にジムメルの社會學論を遵奉して新たに社會學を建設せんとするに至れるものなることが學ばれるが、尙ほ此處に同氏の社會學論の發達に就て特に注意す可きは、同氏に先だちて既にジムメルの社會學論を遵奉し、之を修正し展開して社會學を建設せんと企だて、居た有力なる社會學者のあること、而して又同氏は大に其の社會學者の影響を受けて居ることである。其の社會學者と云ふは即ちアルフレト・フィアカント氏 (Alfred Vierkandt) である。關係論と云ふ名稱の如きもフォン・ウイゼ氏の新造語であるが、しかも同氏がかゝる新名稱を造る直接な動機を與へたるものは、フィアカント氏の論文「社會學的思惟の基本範疇としての關係」(Die Beziehung als Grundkategorie des soziologischen Denkens. Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie, IX, Heft 1 und 2. Oktober 1915 und Januar 1916.) であると思はれる。是れはフォン・ウイゼ氏自身の言葉によりて明らかに察知される。併しフィアカント氏の社會學論はフォン・ウイゼ氏と同じくジムメルの社會學論を展開せるものにして、根本的には兩者は一致して居るが、しかも其の展開の形式や實質的思想に於て色々相異なる點がある。それで余は更にフィアカント氏の社會學論を稍々詳しく論究し、然る後に兩者を合せて今日獨逸に於て盛んに主唱されて居る形式社會學論或は純正社會學論を、余の社會學論の上から論評することとする。